長岡市内遺跡発掘調査報告書

羽　黒　窯　跡
朴ノ木谷遺跡
瓜割五ツ塚１号塚

1998

長岡市教育委員会

序

長岡市内には約400カ所近い遺跡が確認されています。遺跡のうち、古墳や塚それに山城などのように地形から、遺跡の種類や範囲などが判断されるものもありますが、縄文時代の馬高・三十稲場遺跡などの集落跡などは、地下に埋もれているため、地表面からの観察では遺跡の範囲などの確認ができません。このため、地下に埋もれている遺跡は、地形の変更を伴う開発計画との協議を行うには、遺跡の確認（試掘）調査を行い、範囲や内容などの遺跡に関する情報を得る必要があります。このため、長岡市教育委員会は昭和62年度から国や新潟県から補助金の交付を受けて開発が行われると予想される地域や、具体的な開発計画が立案された段階で確認調査を行ってきました。これまでに確認調査を行った遺跡や地域は、30カ所以上になります。確認調査で得られた資料は、そのつど開発計画との協議に活用され、開発計画の変更を促したり、本発掘調査を行う際の基礎資料となりました。

平成９年度に確認調査を行った箇所は、市内深沢町での土砂採取場の拡張計画地と、乙吉町でのゴルフ場計画地、それに土地区画整理事業の五反田町の瓜割五ツ塚１号塚の３カ所です。深沢町の土砂採取場は、須恵器を生産した羽黒窯跡に隣接した地域で、その拡張計画地に窯跡が存在するかの確認調査でした。幸いなことに窯跡は確認されませんでした。おそらく拡張計画地にごく接近して窯跡が存在するものと思われます。また、乙吉町のゴルフ場計画地の調査では、須恵器生産の窯跡の灰原が出土しましたが、窯跡本体はすでに昭和40年代の土砂採取で消滅していることが分かり、灰原と事業地との関係では残地森林の予定地であることが確認されました。瓜割五ツ塚１号塚は、土地区画整理事業の道路拡幅地に当たるため、全体を発掘し、記録を保存しました。

最後になりましたが、確認調査を行うに当たり、御協力をいただきました(株)中越鉱業・東山カントリークラブ株式会社・関原東部土地区画整理組合、朴ノ木谷遺跡の遺物を寄贈されました吉塚新作氏に厚くお礼を申し上げます。

平成10年３月

長岡市教育委員会

教育長　大 西 厚 生

例　　言

1　本書は、平成９年度に実施した市内遺跡発掘調査の記録である。

2　調査に要した経費は、長岡市一般財源と事業者から調査器材等の協力を受けたものである。

3　調査は、長岡市教育委員会が主体となり、文化財保護法の調査担当者を駒形敏朗が、鳥居美栄が調査員として実施した。

4　本書の作成は、駒形と鳥居が執筆し、駒形が全体をまとめた。

5　調査記録は長岡市教育委員会が保管している。

目　　次

1　羽黒窯跡……1

2　朴ノ木谷遺跡……5

3　瓜割五ツ塚１号塚……12

4　おわりに……18

1　羽黒窯跡

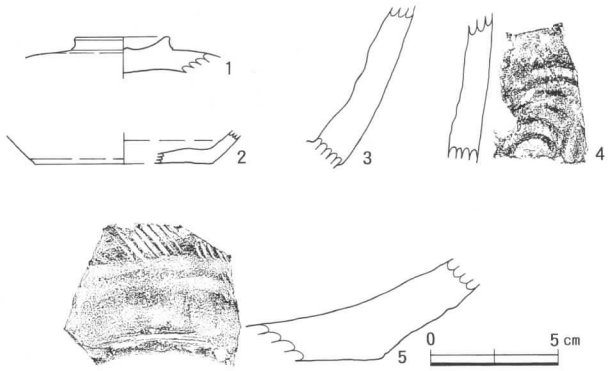
所在地　長岡市深沢町字上の山ほか

立　地（第１図・第３図）　信濃川左岸には数面の河岸段丘が見られる。羽黒窯跡は、深沢小学校からゴルフ場へ通じる道路の両脇で、東側に向いた河岸段丘の崖面に位置していると、これまでの分布調査などから推定されている。崖面の地目は山林で、標高は66～70m。

信濃川左岸で、長岡市の南端部に位置する親沢町から藤橋町までの河岸段丘の崖には、羽黒窯跡のほかに笹山窯跡・岩野原窯跡・蒲堤窯跡の３カ所の窯跡（第１図■）が存在している。この中で発掘調査が行われたのは、８世紀前葉の笹山窯跡の１基だけである。また、この地域には、国指定史跡の藤橋遺跡（縄文晩期）をはじめ、岩野原遺跡（縄文中・後期）・雉子打場遺跡（縄文草創期・中期）・尾立遺跡（弥生中期）などの遺跡が多数所在している（第１図●）。

調査に至るまで　信濃川左岸の河岸段丘は、良質な土砂が採取できるところとして知られ、各所で土砂採取が盛んに行われている。集落跡全域を発掘した岩野原遺跡は、関越自動車道の土砂採取計画（『埋蔵文化財発掘調査報告書－岩野原遺跡－』長岡市教育委員会　1981年）、笹山窯跡は民間の土砂採取工事に伴う発掘調査（『埋蔵文化財発掘調査報告書－笹山遺跡－』長岡市教育委員会　1982年）である。羽黒窯跡の北側でも従前から数回の拡張を繰り返しながら土砂の採取が行われてきた。これまでの拡張は、羽黒

第１図　調査対象地（羽黒窯跡）位置図及び周辺の遺跡（１／50000　長岡）
羽黒窯跡（１）　蒲堤窯跡（２）　藤橋遺跡（３）　尾立遺跡（４）　雉子打場遺跡（５）
岩野原遺跡（６）　岩野原窯跡（７）　笹山窯跡（８）

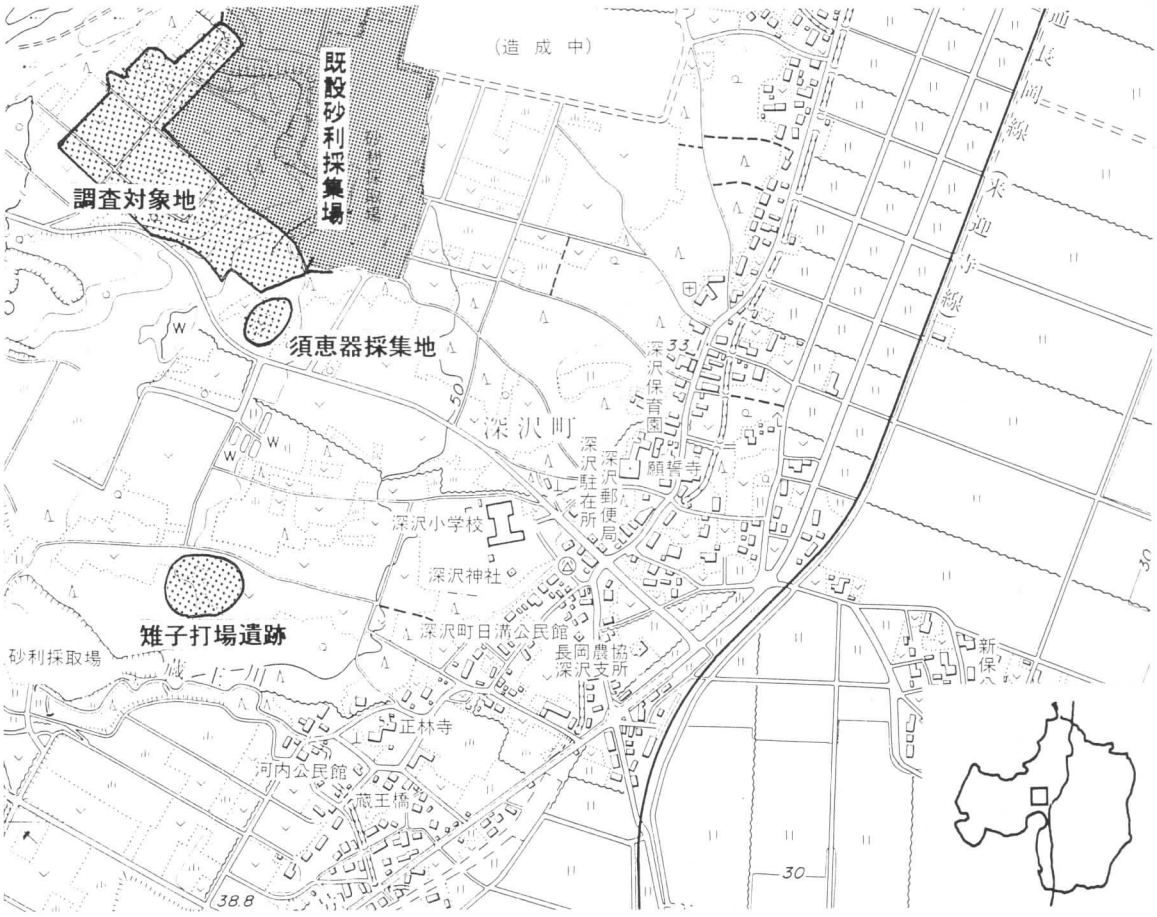


第２図 羽黒窯跡採集須恵器（１／３）

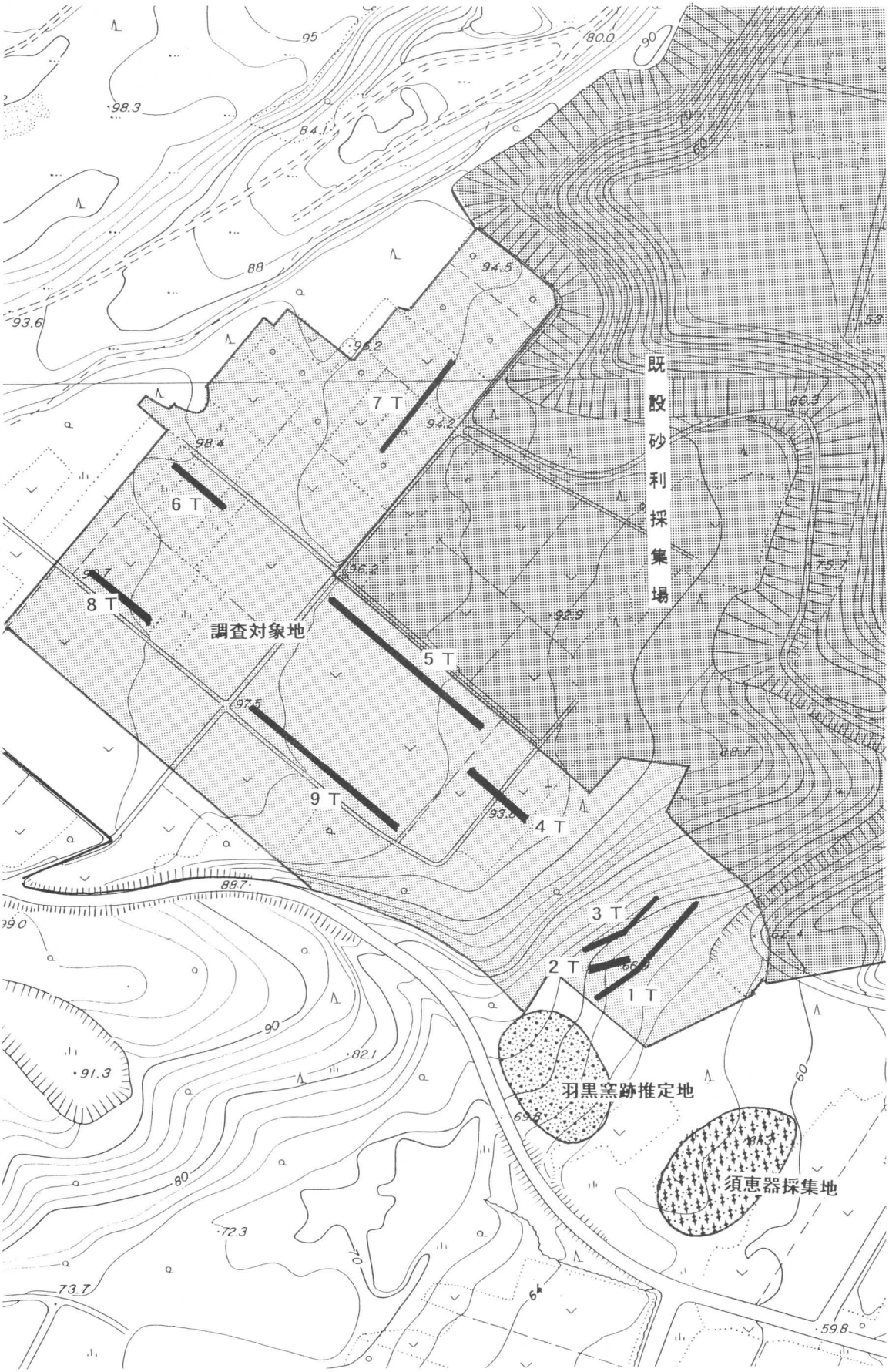
窯跡の推定位置を避けて採取場西側の段丘を対象にして行われ、そのつど事業者の協力で遺跡の確認調査を行って窯跡が存在しないことを確認した上で、土砂採取場を拡張してきた。しかし、現在の採取場での良質な土砂の採取が難しくなり、羽黒窯跡推定地付近まで拡張せざる得ない状況になってきた。このため、事業者と長岡市教育委員会は数回の協議を重ね、平成９年度初めに確認調査を実施することになった。

調　査（４月18日～４月23日）　４月18日に確認調査に必要な調査機材を搬入することから調査を開始した。土砂採取場拡張予定地全体を対象に、21日からパワーシャベルを使って発掘を行う。最初に窯跡の確認のために、窯跡が存在する可能性がある斜面に３本のトレンチを設けて発掘する。崖面に設定したトレンチの幅は２ｍ、３本の総延長は122ｍ、発掘した面積は244㎡である。次いで、標高94～98ｍの上位の河岸段丘面に６本のトレンチを設定して、未周知の遺跡を確認するための発掘を行う。トレンチ幅は２ｍ、総延長は322ｍ、発掘面積は644㎡である（第３図）。現況は、畑である。

調査の結果　崖面に設定したトレンチには、上り窯に特有なガチガチに焼けた窯壁、崩落した天井部や、須恵器などは全く検出されなかった。また、未周知の遺跡の確認を目的にした上位段丘面での調査でも遺構・遺物は検出されず、土砂採取場拡張予定地には遺跡が存在しないものと判断される。



第３図 調査対象地周辺の地形図（１／10000）

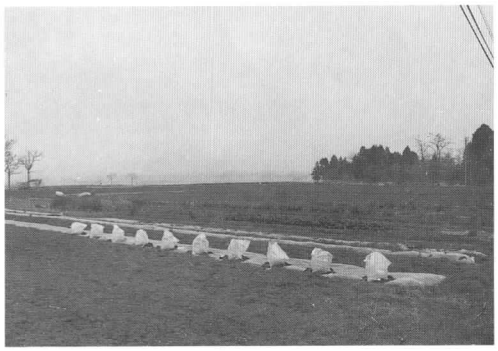


第４図　調査対象地トレンチ図（１／2500）

遺　物（第４図）　　第４図に図示した遺物は、確認調査中に採集した須恵器の破片である。採集地点は、第３図で示した崖下の河岸段丘の畑地である。１は、くぼんだ中央部がやや突起するつまみが付いた杯蓋の天井部で、回転ヘラケズリで調整されている『杯蓋Ａ１類』である（分類は、長岡市「長岡市史資料編１　考古」1992年　『羽黒窯跡』による）。２は、底部と体部の境に稜が見られる無台杯の底部破片で、底部は回転ヘラケズリで調整されている。３は壺の体部破片、４・５は甕の体部（４）と底部（５）破片である。４の内面には同心円による青海波文の叩き痕跡が、焼成時の灰などが被っている外面には平行叩き目がかすかに見られる。５は外面に平行叩き目を残している。年代は８世紀後半と思われる。

まとめ　　調査の結果、土砂採取場拡張計画地には羽黒窯跡と未周知の遺跡が存在しないことを確認した。調査対象地の南側で、ゴルフ場への道路との間の崖面で、微妙な高まりが観察された箇所をボーリング棒で探査をしたところ、窯跡に特有なガチガチの部分が確認された。この地点は須恵器を採集した地点上部の崖面に当たることから、おそらくこの地点に窯跡が存在するものと推定される（第３図）。また、かつて道路の南側からも須恵器が採集されており、今では溜め池となっている箇所にも窯跡が広がっていた可能性がある。今後、別の機会に窯跡本体の確認を行ってみたい。

羽黒窯跡近景



台地上の調査対象地

羽黒窯跡発掘風景

台地上の調査風景

羽黒窯跡１Ｔ完堀状況

台地上の調査対象地５Ｔ完堀状況

写真１　羽黒窯跡発掘調査

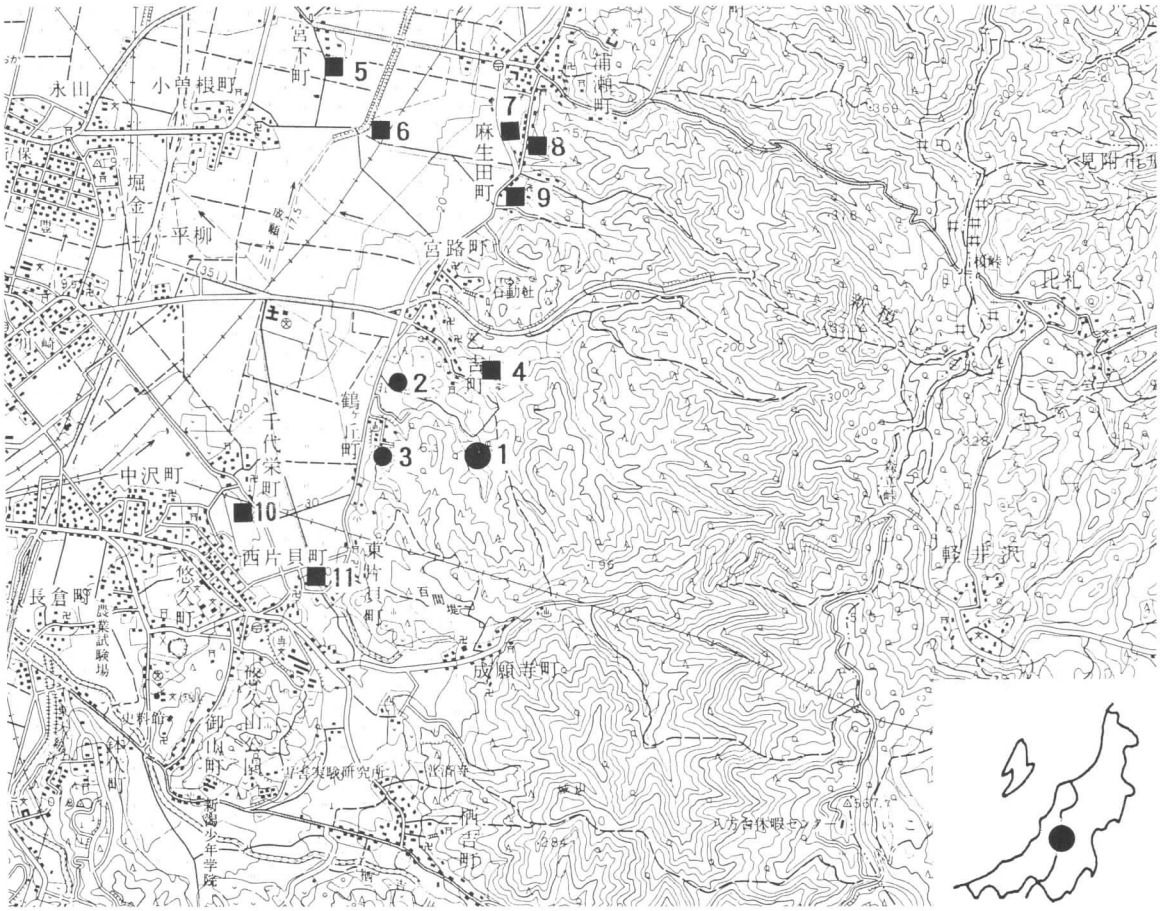
2　朴ノ木谷遺跡

所在地　長岡市乙吉町字朴ノ木谷

環　境（第５図・第６図）　　長岡市と栃尾市を隔てる通称「東山」の丘陵から、西に広がる新潟平野の沖積地に向かって伸びる尾根に挟まれた沢筋に位置している。遺跡がある沢筋は、沖積地から奥まったところにあり、西や北側は急峻な崖になっている。東側も急峻な地形であったと思われるが、現在では1970年代からの土砂採取で削平されている。地目は、畑と水田及び荒地である。標高は、50m～54mである。

遺跡は、1993年の新潟県教育委員会による詳細分布調査で畑などから須恵器や土師器が採集され、新遺跡として遺跡台帳に登録された。地元では遺跡台帳への登録前から、須恵器などが採集される場所として知られていた。なお、調査を行う以前から朴ノ木谷は沢筋に位置しており、集落が存在するとは考えにくい地形であることが気掛かりであった。

朴ノ木谷の沢が沖積地に顔を出す直前には、道路工事で発見された岩村窯跡があり、岩村窯跡から南へ500mの沢の中に1954年に発掘調査が行われた間野窯跡がある（中川成夫・小出義治・甘粕健『古志郡山本村間野窯址発掘調査報告』越佐研究第十三輯　1958年）。また、朴ノ木谷の北側には須恵器や土師器の安楽寺遺跡があり、さらには沖積地や東山の裾部で須恵器や土師器が採集される火焚面・長表・南谷Ａなどの遺跡が所在している。

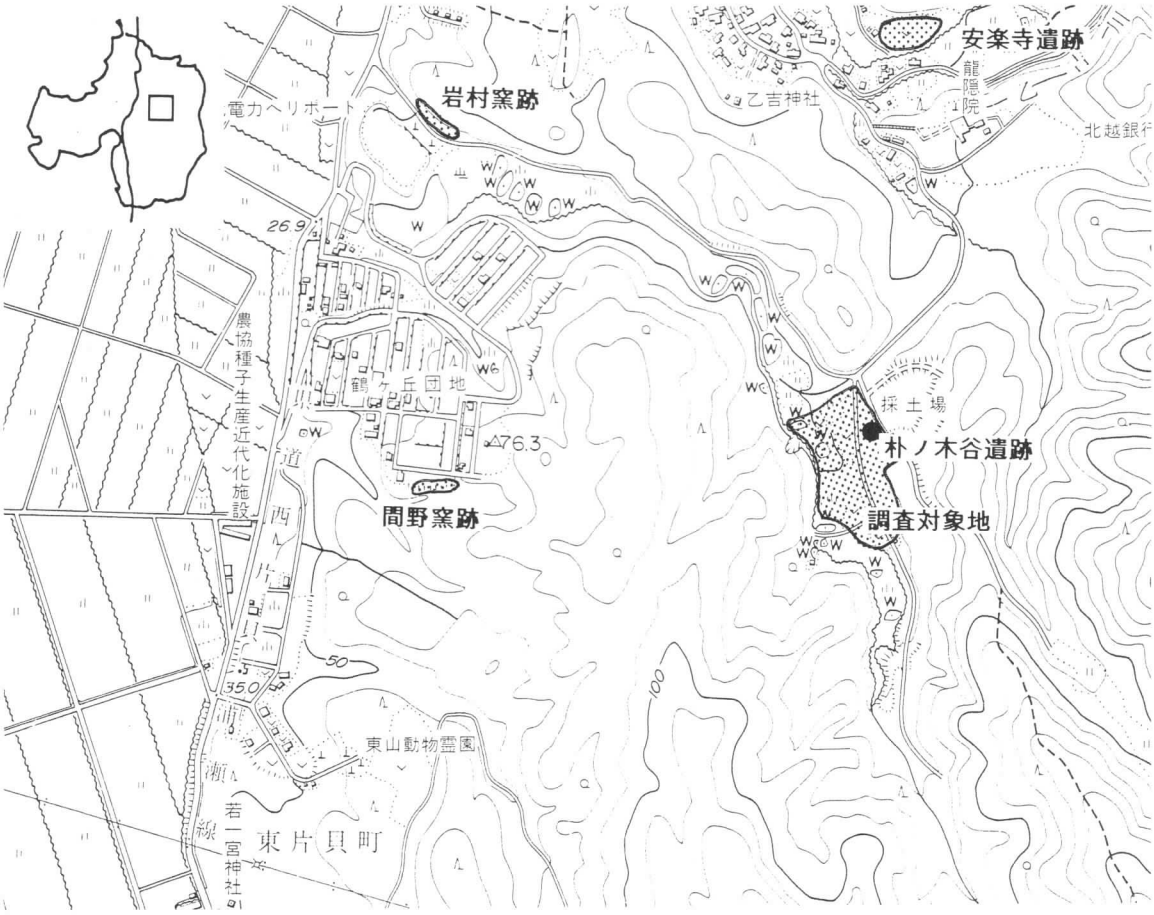


第５図　朴ノ木谷遺跡位置図及び周辺の窯跡（●）・古代遺跡（■）（１／50000　長岡）
朴ノ木谷（１）　岩村窯跡（２）　間野窯跡（３）　安楽寺（４）　火焚面（５）　長表（６）
石ノ下（７）　地下城跡（８）　南谷Ａ（９）　向谷内（10）　宮ノ前（11）

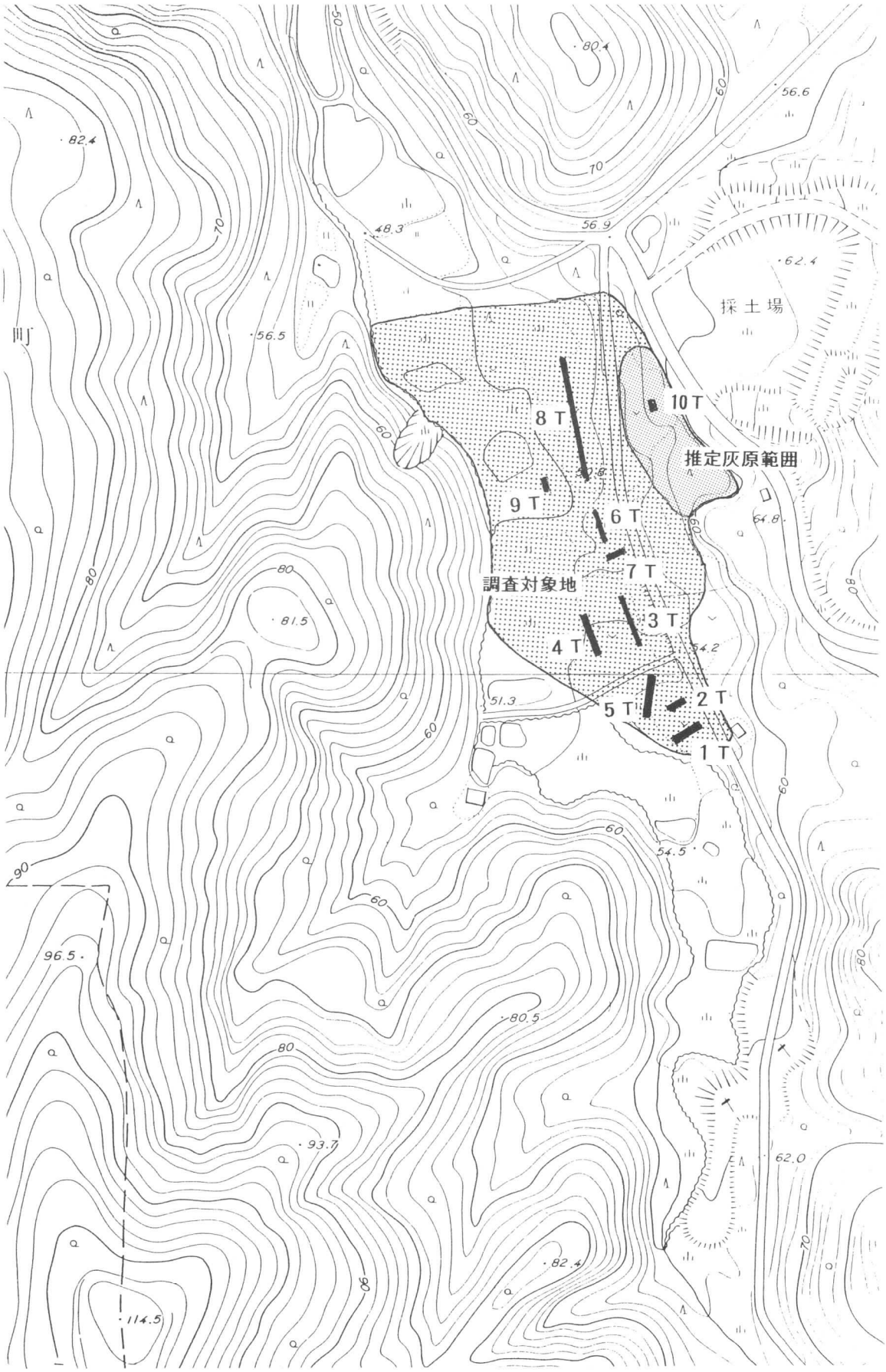
調査に至るまで　東山が沖積地と境を接する箇所で、成願寺町から乙吉町にかけての広い範囲にゴルフ場の建設が計画されたのは、1970年代前半ごろのことである。計画当初の事業地内には遺跡は所在せず、隣接地に東片貝II遺跡が確認されているのみであった。その後、幾多の変更があり最終的に現在の計画地が選定された。最終的な計画地は、朴ノ木谷遺跡がある北側を若干拡幅するものであった。また、ゴルフ場への進入路は、岩村窯跡が面する道路を拡幅して使用することが計画された。このため、長岡市教育委員会は岩村窯跡と朴ノ木谷遺跡の保存方法について、事業者である（株）東山カントリーと数回にわたって協議を行った。協議の結果、岩村窯跡前の道路は窯跡に影響を与えない程度に拡幅して、窯跡の残存部分を現状のまま保存すること、調整池を計画している朴ノ木谷遺跡周辺は、確認調査を行ったうえで再協議を行うこととした。なお、朴ノ木谷遺跡の確認調査に当たっては、事業者から資材置き場用のユニットハウスなどの提供を受けた。

調　査（8月28日・29日）　確認調査は、西側の崖沿いにある水田を除いた畑地と荒れ地を対象に行った。調査の方法は、随所に9本の幅3mのトレンチを設けて、パワーシャベルで発掘する（第7図）。9本のトレンチで遺物が出土したのは、須恵器が各1点の1Tと8Tで、遺物の出土状態は極めて希薄であった。調査以前から思っていた「果たして、沢筋に当たる朴ノ木谷に集落遺跡は存在するのか」という疑問が、再度沸き上がってきた。このため、農道東側の斜面にある畑に約2×4mの10Tを設けて人力で発掘し、生焼けの須恵器などを検出する。発掘した面積は、総計で490㎡である。

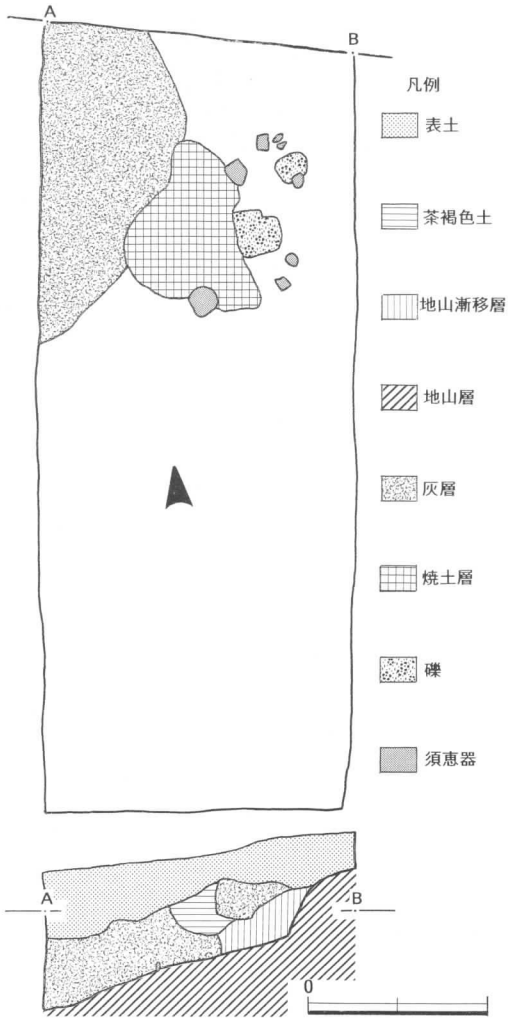
調査の結果　須恵器がまとまって出土したのは斜面に設けた10Tからだけで、沢筋の平地に設けたトレンチからは1・8Tで須恵器の破片が各1点出土したのみである。



第6図　調査地周辺の地形図（1／10000）



第7図　朴ノ木谷遺跡発掘トレンチ位置図（1／2500）



第８図　10Ｔ平面図及び断面図（１／10）

遺　構（第８図）　10Ｔは西向きの斜面に設けたトレンチで、北西側で焼土や灰層の広がりが見られた。灰層は厚いところで約40㎝の堆積、灰層の上部斜面には焼土が広がっていた。焼土面の周りには生焼けの須恵器の甕の破片、倒立した小形甕、それに融解した須恵器の破片が付着した人頭大の礫などが位置していた。この10Ｔの状況は、須恵器生産の窯跡の灰原に特有なものと見られ、10Ｔの上位斜面に須恵器を生産した窯跡が存在した可能性が高い。しかし、10Ｔがある斜面の上位斜面は、1970年代の土砂採取で山が削られ、現在では確認することはできない。

遺　物（第９・10図）　図示した須恵器は、確認調査での出土品と、地元の吉塚新作氏がこれまでに採集し、今回教育委員会に寄贈されたものである。図示した須恵器のうち、白抜きの断面は生焼け、黒べたは須恵器特有の青灰色の色調を呈するものである。

坏蓋（１）　坏蓋はつまみの天井部が欠けた破片の１点がある。天井部はやや平坦で低く、口縁端部は三角形状に尖り気味である。内面はナデ調整、外面は自然釉のため調整痕は不詳であるが、おそらく回転ヘラ削りと思われる。口径は約13㎝である。

坏（２～５）　有台坏（２・３）と無台坏（４・５）がある。２点の有台坏は、いずれも底部は回転ヘラ削りで調整されている。高台の断面は方形を呈している。２の高台の直径は約８㎝であるが、３の直径は約６㎝と小さい。無台坏は２点とも回転ヘラ切りによる切離で、約12㎝前後の口径は共通するが、底径が４は約８㎝、５は約９㎝とで、口縁が４は５に比べて若干外反している。４は倒立していた小形甕に逆さに被った状態で出土した。

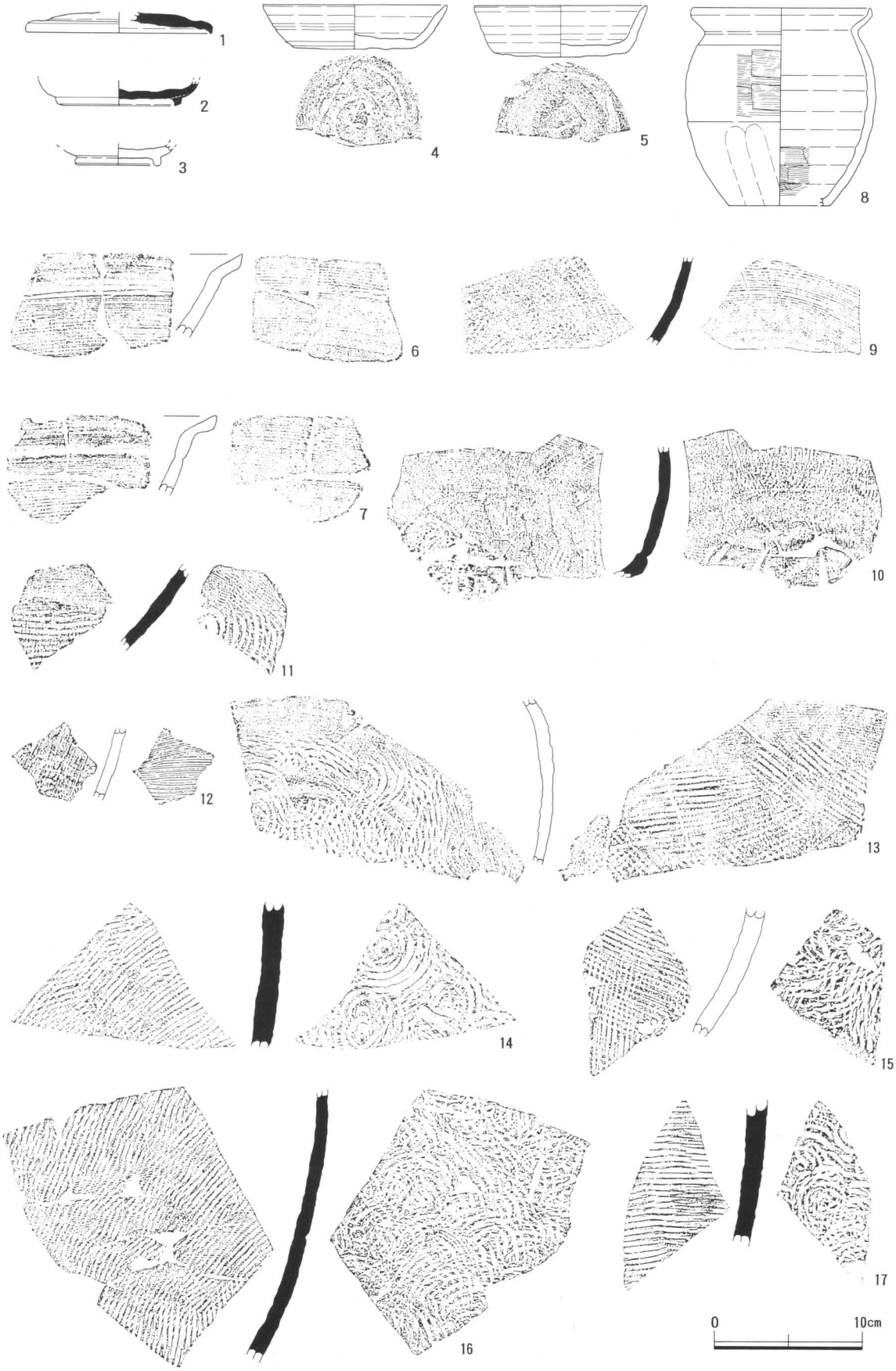
鍋（６・７）　内外面ともに横ナデによる調整が施され、口縁が「く」の字状に外反している口縁の破片である。２点ともに須恵器に特有な青灰色は呈しておらず、土師器のような色調と質感である。

小形甕（８）　灰原の10Ｔで倒立した状態で出土した土器で、底部の底面部分がそっくり欠落している。土師器のような色調と質感である。くびれた頸部から口縁が大きく外反し、口縁端部がほぼ直立する。胴部はやや膨らみながら底部へ続く。器面の調整は、内面がほぼ全体に横ナデが、外面は胴上半部が横ナデ、下半部は上から下へのヘラ磨き調整痕が見られる。

甕Ａ（９～13）　内外面に横ナデ調整が見られる甕の破片をＡ類とした。土師器質で、叩き締め痕跡が見られる長胴甕の類いの土器である。10～13は横ナデ調整痕と、同心円や格子状の叩き痕がある。12・13が長胴甕特有の土師器質であるが、９・10・11は堅く焼き締められ、色調は青灰色を呈している。

甕Ｂ（14～17）　胴部が丸みを帯びて大きく膨らむ大甕の破片である。外面は平行状線の、内面には同心円の叩き痕が見られる。Ａ類と比べて堅く焼き上がっているものが多い。

なお、第10図23は融解した甕の破片が付着した人頭大の礫である。付着の強さは、金づちなどで叩き割



第９図　朴ノ木谷出土・採集須恵器（１）

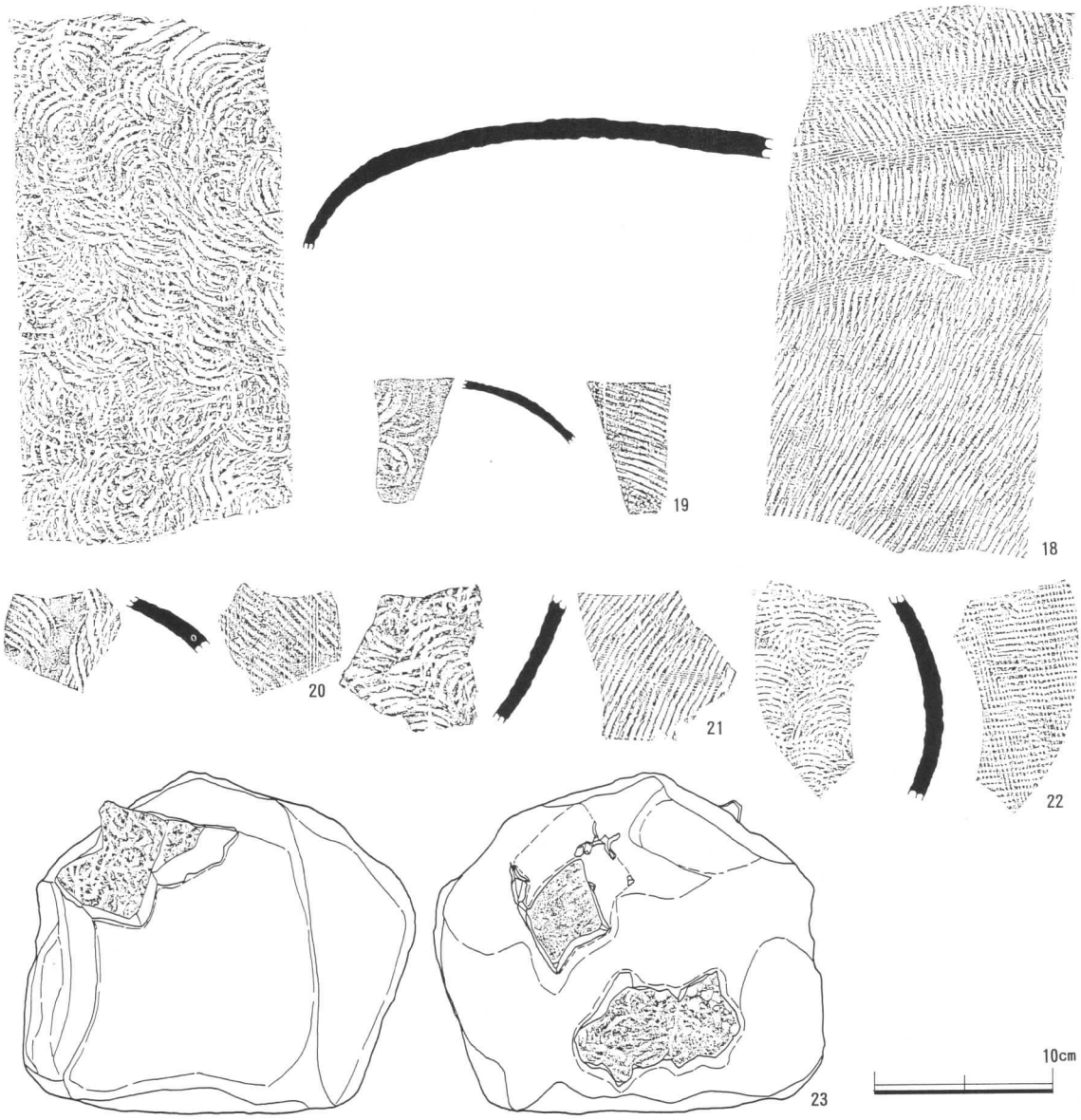
らなければ礫から切り離すことができないほどである。これも10Tが灰原であることを示している。

横瓶（18～22）　横瓶は特有の俵形を呈する器形のため、破片が大きく湾曲している破片を横瓶に分類した。土器の叩き締めの工具に刻まれた文様は、内面が同心円、外面は平行状線で、外面には細い数条の沈線が叩き目の上に見られ、製作時において俵形に整えるために紐をかけた痕跡かと思われる。

まとめ　朴ノ木谷遺跡の確認調査で遺物がまとまって出土したのは10Tだけで、平坦面の１～９Tは遺構は全く確認されず、遺物は３点の須恵器の破片が出土したのみで、遺跡は所在しないものと確認された。

土器が出土した10Tは、状況から須恵器を生産した窯の灰原と思われる。灰原の広がりは、吉塚氏が須恵器を採集した位置なども考慮すると第７図に示した範囲と推定される。須恵器の年代は、坏蓋の口縁端部や、有台坏の高台の状況などから８世紀後半と考えられる。

なお、ゴルフ場開発計画と朴ノ木谷遺跡との関係は、１～９Tの平坦面が調整池の計画地であるが、10Tを含む灰原推定地は、現状を変更しない残置森林として計画されており、開発に当たっては支障がない箇所である。



第10図　朴ノ木谷出土・採集須恵器（２）

朴ノ木谷遺跡遠景（東の土取り場上から）

発 掘 風 景

発 掘 風 景

8 T完堀状況

10T （灰原）近景

10T （灰原）発掘風景

10T （灰原）焼土・土器等出土状況

10T （灰原）土器等出土状況

写真２　朴ノ木谷遺跡発掘調査

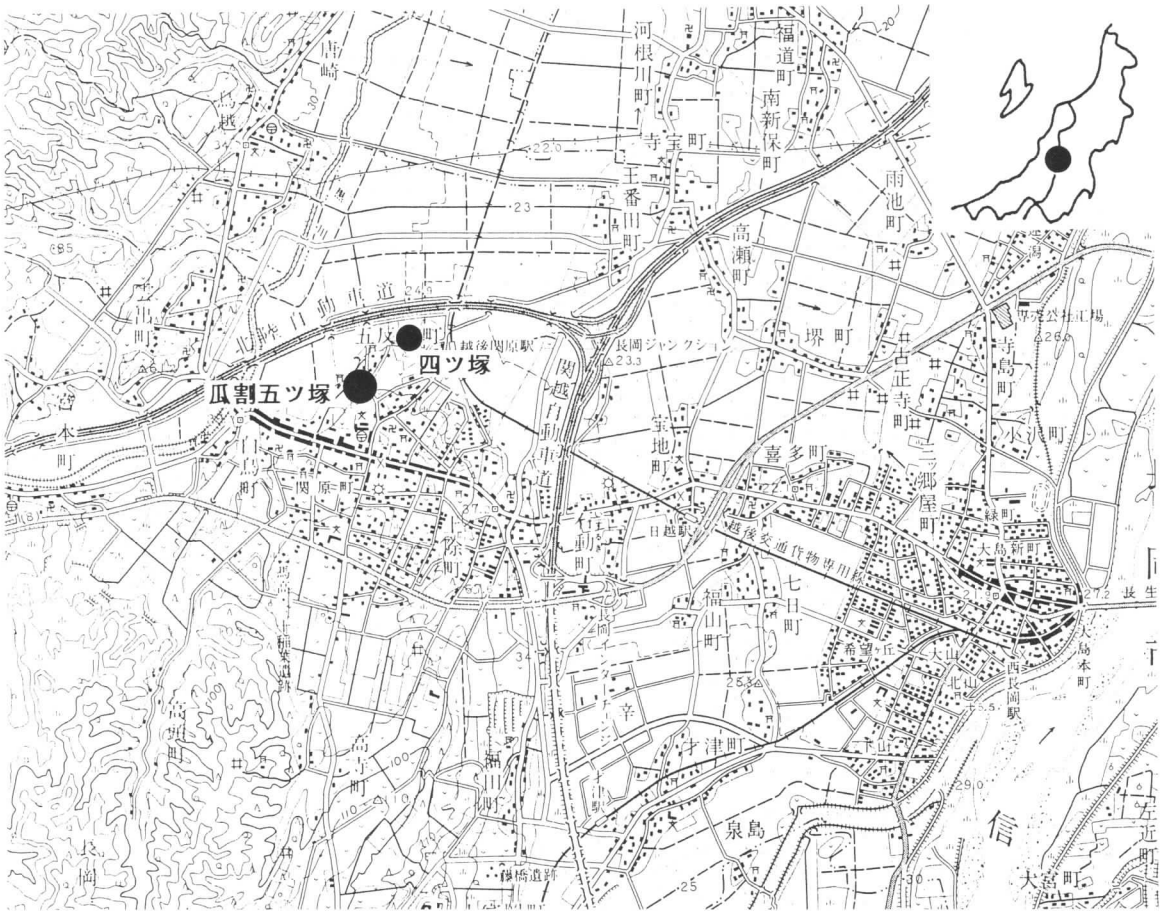
3　瓜割五ツ塚１号塚

所在地　　長岡市五反田町字瓜割

環　境（第11図～第13図）　　関原丘陵と通称される信濃川左岸に広がる河岸段丘が、沖積地の新潟平野に突き出る段丘の西側縁辺部に位置する。標高は約33mで、沖積地との比高は約５ｍを測る。関原丘陵の西側の雲出町から三島町にかけても河岸段丘が広がっている。その間には長岡市と柏崎市との境界付近を源流とする黒川が流れている。南西から北東に向かって流れてきた黒川は、沖積地に顔を出す白鳥町付近で関原丘陵側に接した後、大きく雲出町側へ蛇行して河岸段丘沿いを北へ流れている。

なお、瓜割五ツ塚は、名称から５基の塚が並んでいると思われるが、今回の調査時に確認できたのは４基で、1992年の新潟県教育委員会の詳細分布調査でも３基しか確認できなかった。

瓜割五ツ塚は段丘縁辺部の林の中でほぼ南北に４基の円形塚が並んでいる。そのうちの２基は、縄文時代中期の瓜割遺跡の中に位置し（駒形敏朗『長岡市内遺跡群発掘調査報告書－瓜割遺跡・三ノ輪遺跡・六右ェ門清水遺跡・三貫梨遺跡－』長岡市教育委員会　1991年）、他の１基は１号塚と道路を挟んだ北側の林に位置していた（第13図）。調査対象の１号塚は、瓜割遺跡とは埋没沢を挟んで北東側に位置している。また、瓜割地内より北側の五反田町字上の山地内で、河岸段丘の北側縁辺部に四ツ塚がある。四ツ塚は、直径約７～８ｍ、高さ約1.5mの円形塚が東西に４基並んでいる塚群で、瓜割五ツ塚から直線で約100mほどのところに位置している。



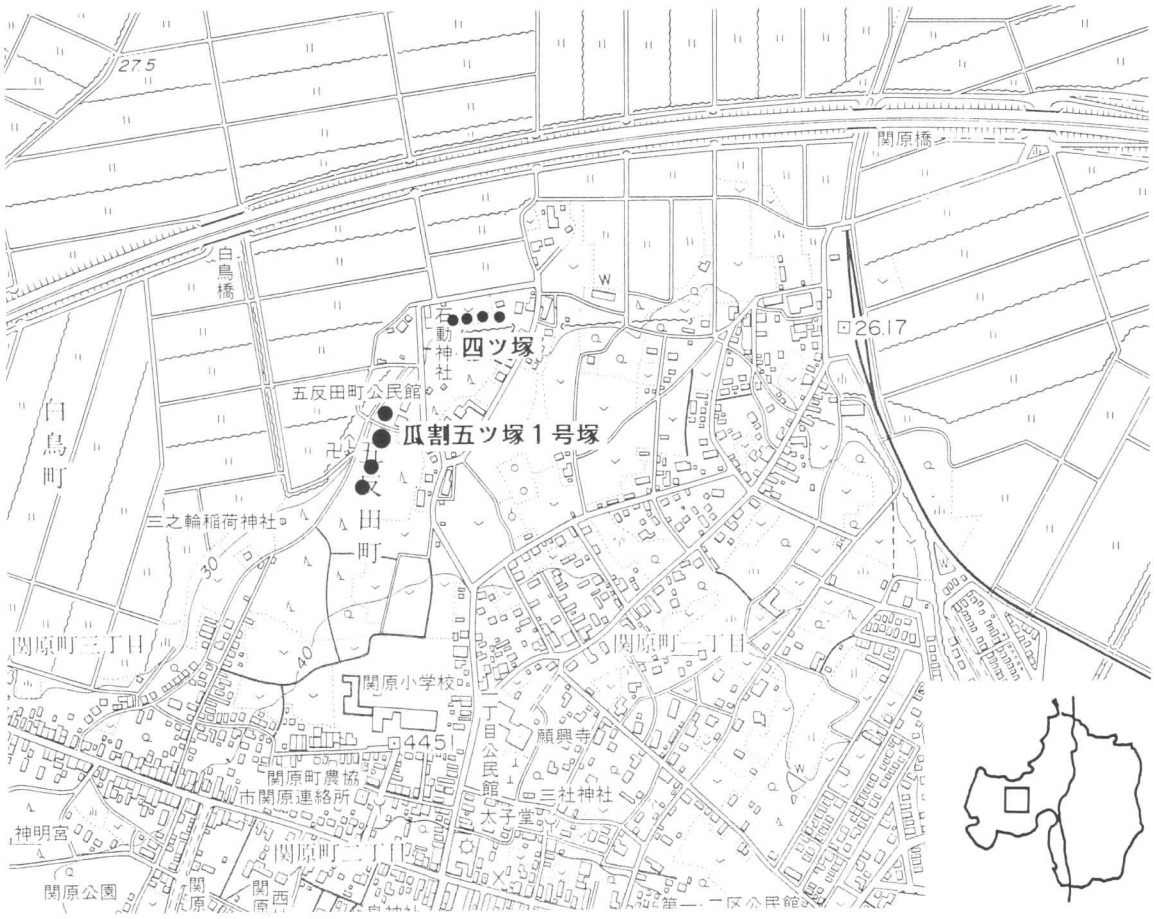
第11図　瓜割五ツ塚・四ツ塚位置図（１／50000　長岡）

調査に至るまで　長岡市関原町から五反田町にかけて土地区画整理事業（関原東部土地区画整理事業）が行われており、これまでに平成２年度に事業地を対象とした遺跡の確認調査と、平成７年度に事業の一環である道路工事に伴って三ノ輪遺跡の発掘調査が行われている。確認調査では、２・３号塚と重なっている瓜割遺跡で縄文時代中期の石組炉を、三ノ輪稲荷神社付近の三ノ輪遺跡で弥生時代中期初めの再葬墓を中越地方では初めて発掘した（駒形『前掲書』）。道路工事に伴う発掘調査は、再葬墓の近くで縄文中期中葉の竪穴住居跡１軒を発掘した（駒形敏朗『長岡市内遺跡発掘調査報告書－藤ケ森遺跡・五斗田遺跡・三ノ輪遺跡・本途地区・土手端地区－』長岡市教育委員会　1997年）。

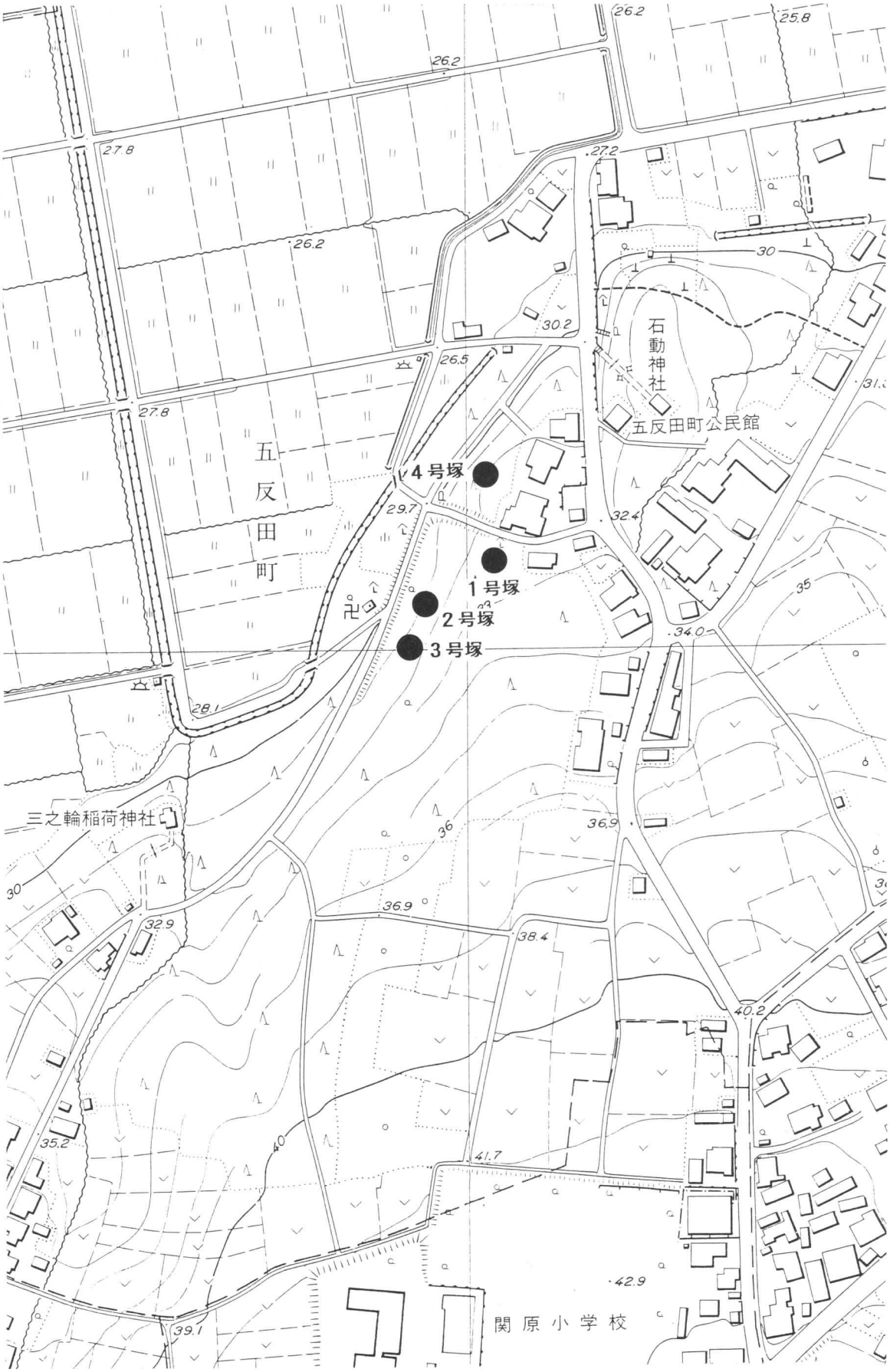
今回の発掘調査は道路の拡幅計画が１号塚の裾にかかるため、発掘調査を行って記録を保存することで、事業主体者の関原東部土地区画整理組合と協議が成立した。なお、調査は作業員賃金や地形測量、それに写真にかかる経費などを事業者が負担して行った。

調　査（９月８日～９月17日）　発掘を開始する前に、調査担当者が指導して測量会社に委託して地形測量を実施し、発掘箇所の樹木の伐採などを行う。そして、９月８日に調査機材を現地へ搬入し、10日から１号塚の発掘を行う。発掘は、塚の東半分から掘り始め、延４日間をかけて行い、16日に発掘を終える。そして、17日に調査機材を撤収して現地における調査を終了する。

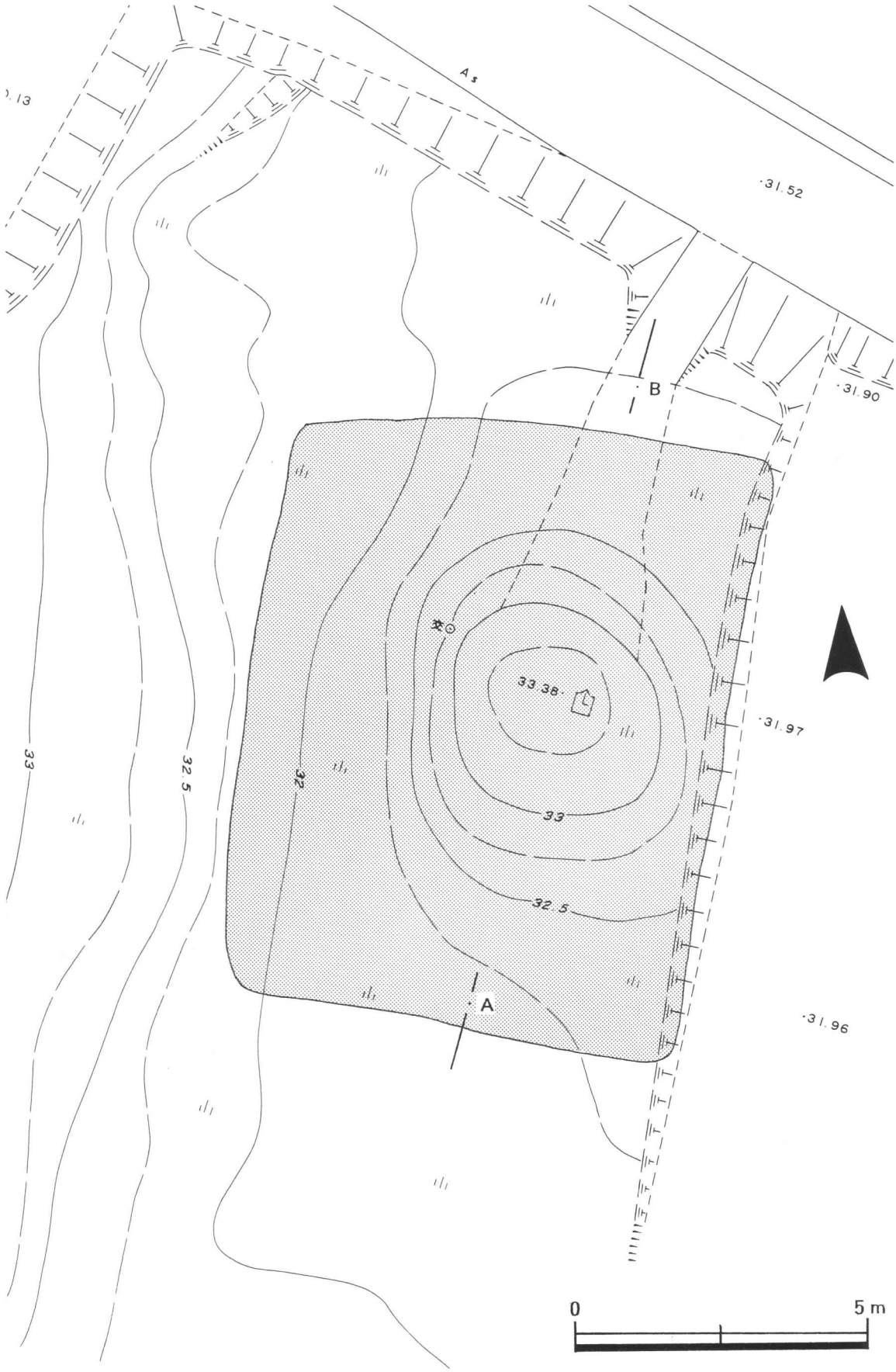
外部形態（第14図）　１号塚は、基礎部の南北約６ｍ、東西約５ｍの南北に細長い楕円形で、平均しての高さが約１ｍで、墳頂部は円形を呈するいわゆる土饅頭形の塚である。塚の墳頂部には石造の地蔵尊が安置されていた。また、墳頂部付近には小石から拳代の礫が多数あったが、葺石の類いとは思われない。なお、外形上からは周溝などは確認できなかった。



第12図　瓜割五ツ塚周辺の地形図（１／10000）



第13図　瓜割五ツ塚周辺の地形図（1／2500）



第14図　瓜割五ツ塚１号塚平面図（網掛部分が発掘箇所、１／100）

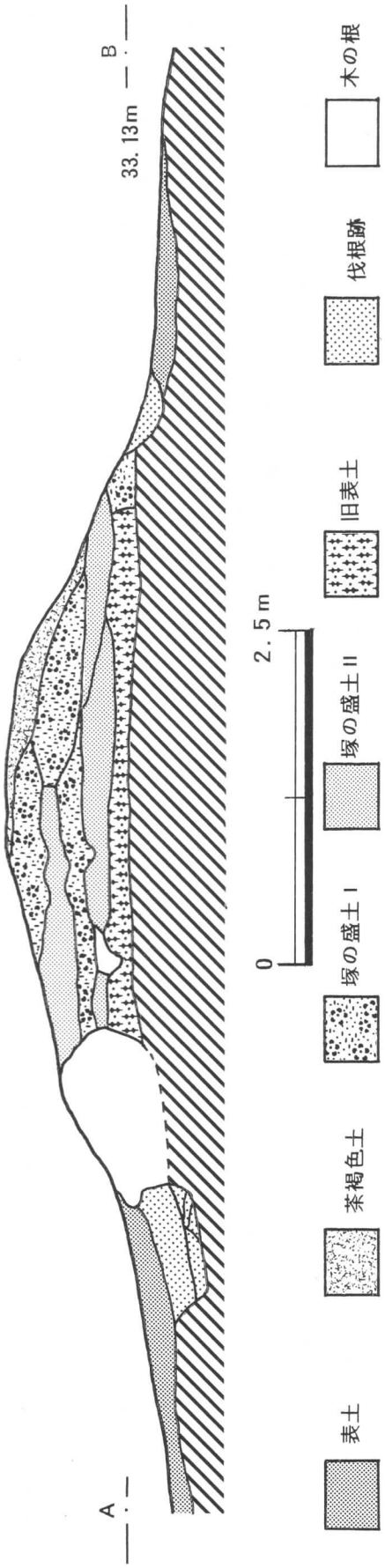
内部施設　経塚のように経典を納めた施設などは、１号塚の内部にはまったく見当たらなかった。ただ単に土を盛り上げたものと考えられる。

土層（第15図）　塚は、基底部を方形に削り出した土を、土饅頭形に盛って封土としている。基底部は表土の黒色土と地山の黄褐色土を削っているため、塚の封土は黒色土と黄褐色土が混じっている。第15図の塚の盛土Ｉは黒色土が多く混入した盛土材、塚の盛土IIは黄褐色土の混入度が強い盛土材である。封土の盛り方は、旧表土の上に盛土材を水平に盛っている。なお、同じ塚の盛土Ｉ及び塚の盛土IIであっても黒色土や黄褐色土の混入の度合いによって細分される。

基底部（第16図）　塚の基底部は、平面を長方形にして台形状に削り出している。基底部に遺構は確認されなかった。第16図で基底部などにピット状の落ち込みが見られるが、いずれも木根跡である。

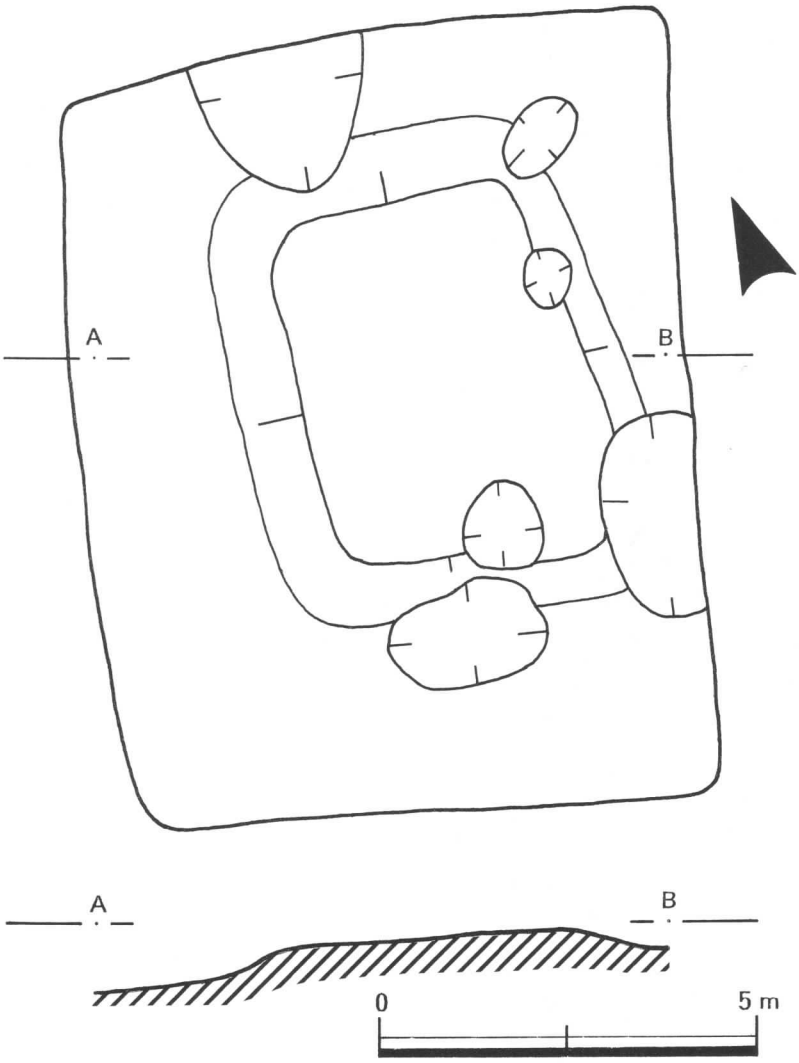
遺物（第17・18図）　塚の封土及び基底部からは、縄文土器・磨製石斧・凹石などの縄文時代の遺物が出土した。それ以外には、直接的に塚の構築年代を示す遺物はなかった。１号塚は、縄文中期の瓜割遺跡に近接する地理的な関係から縄文時代の遺物が出土したものと思われる。

縄文土器は13点（重量350ｇ）の破片が出土している。第17図１は頸部の破片で、半截竹管で円弧状の文様が描かれている。縄文中期中葉の土器である。文様があるのはこの１点だけで、他は縄文若しくは無文である。磨製石斧は定角式の磨製石斧が１点（第18図１）出土している。刃は両刃で、直刃である。石材は黒味を帯びた蛇紋岩である。凹石は２点出土している。第18図２は欠損しているが、両面に２個の凹穴があるもので、３は平坦な面の３カ所に凹穴が見られるものである。

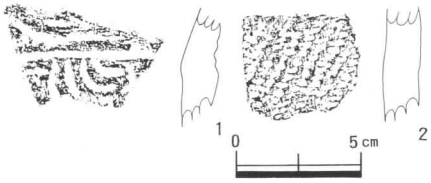


第15図　瓜割五ツ塚１号塚断面図（１／50）

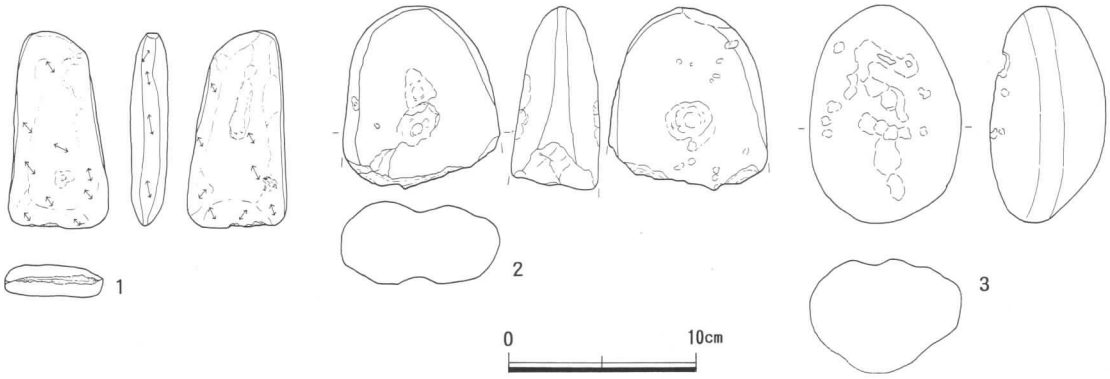
まとめ　瓜割五ツ塚１号塚は、外形上は南北にやや長い楕円形の土饅頭を呈していたが、発掘したところ基底部はやはり南北に長い長方形であったことが判明した。おそらく構築当時は長方形の土饅頭形の塚であったものが、長い年月の間に楕円形に姿を変えたものと思われる。しかし、塚の封土などから出土した遺物は、隣接する縄文中期の瓜割遺跡に関係する縄文土器などであり、塚の構築年代等や、経典や一字一石など、塚の性格を探る資料は出土しなかった。



第16図　瓜割五ツ塚１号塚基底部平面・断面図（１／100）



第17図　１号塚出土縄文土器（１／３）



第18図　瓜割五ツ塚１号塚出土石器（１／４）

1号塚近景（東から）

1号塚近景（北から）

発掘風景

発掘風景

1号塚断面

1号塚基底部

写真3　瓜割五ツ塚1号塚発掘調査

4　おわりに

平成9年度の市内遺跡発掘調査は、土砂採取場の拡張計画の羽黒窯跡、ゴルフ場開発計画の朴ノ木谷遺跡、道路拡幅工事の瓜割五ツ塚1号塚の3カ所で実施した。その結果、開発計画に伴う確認調査の羽黒窯跡及び朴ノ木谷は、開発計画地から外れているか、若しくは残置森林として現状のまま保存される箇所であることが判明した。この結果については、調査終了後に事業者に口頭で伝えた。事業者はそれを受けてそれぞれの計画を実施に移す準備に入った。

長岡市教育委員会は、今後とも開発を計画している事業者の理解と協力を得ながら、埋蔵文化財の適切な保存に努める努力を続けていきたいと考えている。

報告書抄録

ふりがな	ながおかしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	長岡市内遺跡発掘調査報告書
副書名	羽黒窯跡・朴ノ木谷遺跡・瓜割五ツ塚１号塚
巻次数	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	駒形敏朗
編集機関	長岡市教育委員会
所在地	〒940－8501　新潟県長岡市幸町２－１－１　TEL 0258－39－2240
発行年月日	1998年３月25日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
羽黒窯跡（はぐろかまあと）	長岡市深沢町字羽黒（ながおかしふかさわまちあざはぐろ）	15202	77	37°24′42″	138°46′32″	970418～970423	644	土砂採取
朴ノ木谷（ほうのきだに）	長岡市乙吉町字朴ノ木谷（ながおかしおとよしまちあざほうのきたに）	15202	340	37°26′32″	138°49′26″	970828～970829	490	ゴルフ場
瓜割五ツ塚１号塚（うりわりいつつつかいちごうつか）	長岡市五反田町字瓜割（ながおかしごたんだまちあざうりわり）	15202	144	37°27′18″	138°46′40″	970908～970917	84	土地改良道路

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
羽黒窯跡	窯跡	奈良時代	なし	なし	開発地外であった窯跡は消滅、灰原が残存していた。灰原は、開発除外地に当たる
朴ノ木谷	窯跡	奈良時代	灰原	須恵器	
瓜割五ツ塚１号塚	塚	近世？	塚	縄文土器	

長岡市内遺跡発掘調査報告書
－羽黒窯跡・朴ノ木谷遺跡・瓜割五ツ塚１号塚－
平成10年３月25日発行
発行：長岡市教育委員会　　印刷：株式会社　第一印刷所